

アンデスにおける大地信仰の複層性

岡本年正（慶應義塾大学等非常勤講師）

キーワード： 大地、パチャママ、アリユパ、クロニカ、カトリック

Plurality of the Land Worship in the Southern Andes

TOSHIMASA OKAMOTO (Keio University, Part-time lecturer)

Keywords: Land, Pachamama, Allpa, Chronicles, Catholicism

本発表は、前年の発表に続き、パチャママ信仰におけるパチャママがいかに捉えられているのか、そして大地信仰そのものとの関係を、その変遷と現状について考察することを目的とする。

前回発表では、パチャママそのものとパチャママが置かれている状況について、歴史的、民族学的、社会・政治的視点から分析した。パチャママは個別/局地的で具体的であり、かつ普遍的であるという二つの側面を同時に有しており、現代世界において、その普遍性がいかに発揮/利用されている。そこでのパチャママは、大地と同義であり、かつ自然環境全体へと昇華された存在となっている。その意味において、アンデス地域という地理的枠組みや民間信仰という宗教的枠組み、そして先住民文化という文化的枠組みを超えて普遍的存在として扱われている。

このようなパチャママの扱われ方において、パチャママと地球規模の大地がつながってきた経緯はいかなるものか、そもそもアンデス域内における地域的なバリエーションがあるのか/あったのか。これらアンデスにおける大地信仰のミクロな経緯を分析することで、現在のパチャママ信仰の隆盛がより考察できると考える。

いつからパチャママの語が用いられているかをさかのぼるには、文字資料としてのクロニカを参照するほかない。クロニカにおけるパチャママの記述に関しては、Daniela di Salvia による論考が参照できる。Di Salvia は、大地を「母」(madre) と関連付けた「最初」の記述を 1555 年の Agustín de Zárate のクロニカに見出し、女性性のある偶像(ワカと考えられる)を、1571 年の Pedro Pizarro の記述に見つけている [Di Salvia 2013:93]。また大地の偶像は、太陽と月とともに

守護者として祀られていることを、Cieza de León の 1553 年の記述などに言及している。そして大地が「太陽と月とともにすべてのものの母」であることや、Polo de Ondegardo の記述から、創造神であるヴィラコチャに続いて、太陽や星などとともにパチャママと呼ばれる大地が崇拝されていること、またそれがカマック・パチャ (Camac pacha) と呼ばれていることを見つけ出している。また 1613 年に Santacruz Pachacuti によって著されたクロニカ内の描画(太陽神殿コリカンチャにあったとされるもの)には、パチャママが大地として、そしてカマック・パチャとも記述されながらインカの世界観の一部とされている。

これらから、パチャママのイメージがクロニカを通して創られ、インカの世界観に統合される過程で地域性が消滅していった可能性がうかがえる。現代において、例えば Vitry は、パチャママは「生命を支えるために必要な自然的、物質的、象徴的な力の全てを携えている」[Vitry 2003:232] と分析しており、先の Santacruz Pachacuti の描画の延長として、パチャママが大地以上の存在として認識されていることがわかる。またカマック・パチャとは「カマックという生命のエネルギーを与える大地」を意味していることも、大地のみの表象を超えた神格であることを表している。

ところが、パチャママを辞書を見ると「耕作された大地だけ」を指し、「人間の労働の活動によって耕されたもの」とある。そうでなければ、アリユパ (allpa) と呼ばれており、そのアリユパは、悪い霊が宿っているとされている。つまり、パチャママはもともとすべての大地という意味合いはなく、人間が手を加えた大地のみを指すので

あり、耕作地から大地全体へと範疇が拡張されていったことになる。創造神に準ずるような存在、また自然環境全体や世界そのものを体現するものとは異なっていると言える。

このようにみえてくると、「パチャママ＝大地」とは常に言えない。ここでマルチスピーシーズ人類学の考えを援用して考察すると、人間、大地、パチャママという少なくとも3者がともにあり、アンデスの人々とパチャママの「絡まりあい」がアンデスの大地の上で行われ、そこで「大地＝パチャママ信仰」という一般的な観念が「発明」された可能性を指摘できる。この絡まりあいの度合いは様々であるが、次のように3つの認識に分類できるだろう。「大地＝パチャママ」「大地≡パチャママ」「大地≠パチャママ」。

「大地＝パチャママ」は一般的なかかわり方と言え、パチャママを自然環境全体として拡張することができる。これがエクアドルやボリビアの法に言及されたパチャママであり、環境保護活動に取り上げられるパチャママである。また先住民文化を子供たちに教育する一貫で、やはり環境として守るべき大地＝自然として言及される場合も同様であろう。

「大地≡パチャママ」は、大地にかかわる人々のかかわり方であり、パチャママは手を加える相手としての大地である。事例として、都市クスコ郊外で行われた地鎮祭(2010年8月28日)を取り上げる。ここで行われたパゴ儀礼(大地に供物を捧げる儀礼)に際して、主催者の一人は「パチャママに伺いを立てないとパチャママが怒る」とし、パチャママを現実の主体として捉える。その一方、大地そのものから何かを受け取るということではなく、パチャママはすべてがうまくいくように祈る相手となっている。これは、パチャママは大地に属していながらも、大地にカマックを与える存在であり、主催者たちはパチャママを介して大地からの互酬(アンデス世界の秩序の形)の結果を受け取っていると言える。

「大地≠パチャママ」は、都市における人々(大地と直接かかわりを持たない人々)の実質的なパチャママとの関わり方である。パチャママが空腹であるためパゴ儀礼を行い、食事とし

て供物を捧げると言われるが、カトリック的な発想として神に供え物をするのと同様に、パチャママにお供えをして成功を得ようとしていると捉えられる。パチャママは大地を離れた神格として存在し、大地自体は生活世界であり、パチャママ信仰はもはや大地信仰ではない。パチャママの語がスペイン語からの語であり、「ヴィルヒナ」(Wirhina)がケチュア語での表現と考えるケチュア語(かつアイマラ語)話者がいるように[Howad-Malverde 1995:143]、カトリックとの混濁が多分に影響している。

ここまで見たように、現代世界におけるパチャママと大地、そして人々との関係が複数存在する源泉の一つに、クロニカを通してのパチャママの拡張があると言える。そしてパチャママは生産を行う場所としての大地であったり、生産物や成功を与える存在として、つまり神格としてのみのパチャママであったり、複数の認識のされ方をしている。この複層性が、現代世界における大地とパチャママの「取り違え＝多義性」であり、アンデス世界において農村部でも都市部でも大地信仰が続いている力の源泉であろう。

【主要参考文献】

- Di Salvia, Daniela, 2013, La Pachamama en la época incaica y post-incaica: una visión andina a partir de las crónicas peruanas coloniales (siglo XVI y XVII). *Revista Española de Antropología Americana* 43(1):89-110, DOI: http://dx.doi.org/10.5209/rev_REAA.2013.v43.n1.42302.
- Howard-Malverde, Rosaleen, 1995, "Pachamama is a Spanish word": Linguistic Tension between Aymara, Quechua, and Spanish in Northern Potosí (Bolivia). *Anthropological Linguistics* 37(2):141-168.
- Vitry, Christian, 2003, Fiesta nacional de la Pachamama: El ritual de alimentar a la tierra. In *Gastronomía y turismo: Cultura al plato*, edited by Gloria. C. Lacana, & Juana A. Norrild, pp.227-244, Centro de Investigaciones y Estudios Turísticos, Buenos Aires.